

8888

報新濱横

り
ほ
ま

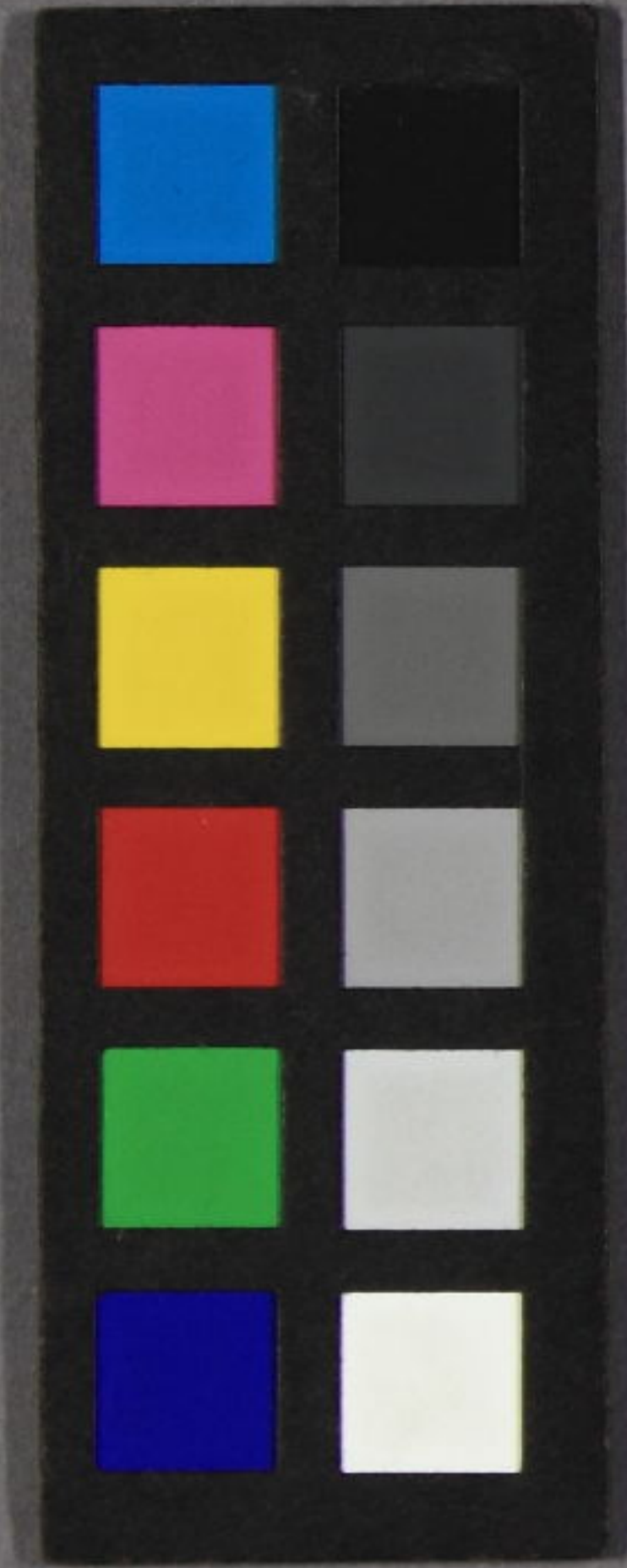


第三編

九十三番

ウエンリート

定價壹匁



特 文庫10

7388

3

勸業

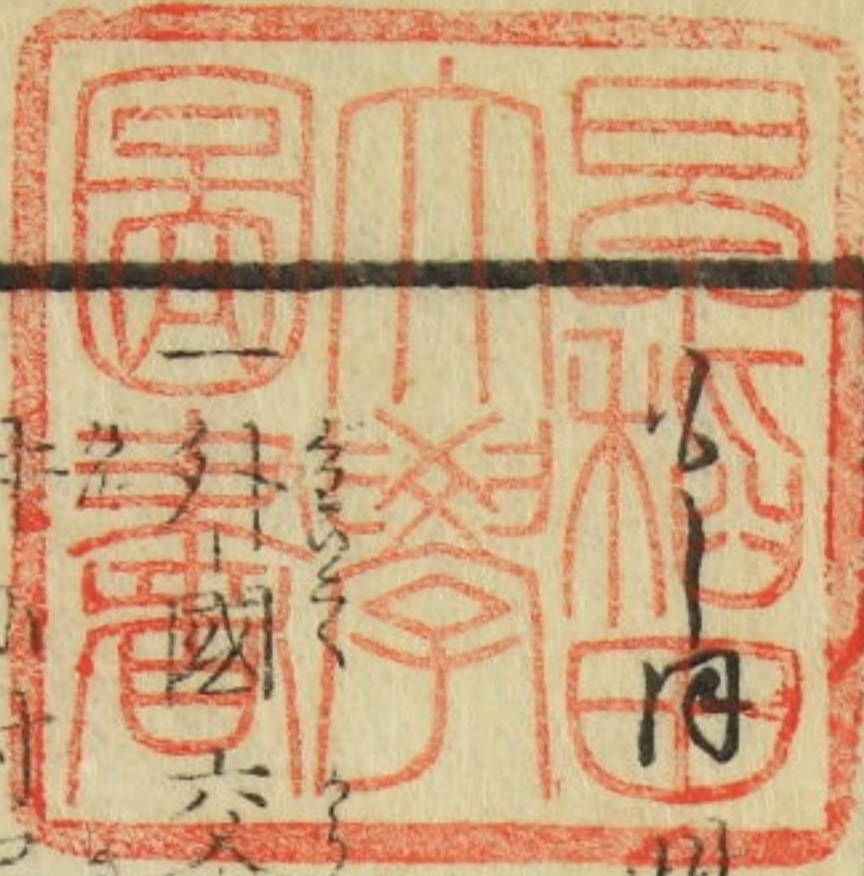
勸業

勸業

勸業三篇

慶應四年戊辰閏四月十九日

西澤文庫



○條約

一 外國の興廢小關係を至大至重の事
 件に付局中勤勞を爲す役々各同心協和長短相助確乎不
 動の見識を持し信義を外國の失せざるを旨趣とす
 一局中一勤勞を爲すに各區分を定横濱箱館長崎神戸より
 傳達往返を爲す處の公用ハ其掛の役々是を專任し首尾
 貫徹するを要ス故に混乱の憂ある事あり
 一局中九時ハ出勤午後一時ハ退散す間一統勉強各精力
 を勵し互に各般の諸事件を談論し自己の旨意ハ

満ざる者腹臆たしく其件とを説破し餘念を不可残り
過失ある時ハ直小悔改し敢て金言耳に逆以良薬口
小苦きの通弊を不可踏
右之通約束を定め其枝葉の如きは互小信實を盡し
精細小評議し第一我皇朝の木典を以て根軸と成し
宇内の通議に基き富強充實を海外に延及せんを
希ふ

戊辰閏四月

外國事務

小松帶刀

後藤象三郎

○閏四月五日御觸

江戸市中取締之爰町奉行江御仰被遊吉 大總督宮
様へ被仰出の間下際勉勵可致吉 田安中納言殿へ被
仰渡の間取扱振之儀相伺ひ品も有之以得共右ハ追而御沙
汰有之の迄前々之通相心得可申吉被 仰渡の付而者
公事訴訟筋之儀者勿論都而民情の不安之爰有之の
無掛念月番之番所江可訴出の御時節柄を憚り差控
居の族も有之趣相聞の間右之旨町中不洩様早々可相
觸候

○滑耀先生日記の抄寫

戊辰四月七日下總國結城落城城主水野某官軍（えんげん）の屬（ぞく）たるを其子某江戸（あり）に在り、此吏を聞大ふいねとあり、此を三百年來徳川氏の恩澤（おんさく）を蒙りたるを、此期ふいねとあり、官軍（えんげん）の從（まが）ふ吏甚不義なり、父（ちち）の命を奪ふと云ふ、差置（さしお）がらうと云ふ、俄に合戦（あひびき）の用意（ようい）を仰（おんが）けり、兵丁武器（ぶき）を多し、徳川家（とくがわ）のたのむに、太砲（たいぱう）數挺を、歩兵（ほへい）數百人を借請（かりうけ）即江戸（えど）を打立（うちた）ちて、父のこりりある本城（ほんじょう）をとり、かごと大砲（たいぱう）を打（うち）つゝ、攻立（こうた）ち、父城中（ちゆうじゆう）にたまり、ついで落（おち）行（い）け、其子城（しじょう）に入り、てい、三日（さんじつ）たると、さるふ近（ちか）き、つゝ、ふ

たるを、居たる官軍此由（このよし）をき、不孝不忠（ふこうふちゆう）の者なり、とて、忽（たち）ち、小せ、あつゝ、逃（に）げて、ゆゑ、さる、あつゝ、なり、み、る、と、て、八日下野國壬生（しんせい）の城主鳥井某者（とりいぬら）あつゝ、官軍（えんげん）の屬（ぞく）たるの處、今日官軍より使者を以て大砲を借請た、さ、り、掛合（かかけ）に及（およ）び、早（はや）速（すみ）兼引（あつゝひ）、砲術（ぱうじゆつ）先生（せんせい）も、差漆（さし）借（かり）、渡（わた）、り、た、と、て、九日官軍二百五六十人壬生より野州榆木鹿沼等（のしゅううづきかぬま）の駅（えき）を經（へ）、日光（にっこう）の方（かた）へ、通行（つうこう）せ、薩長（さつちやう）長（ちやう）なり、び、小倉根（こくらね）の兵士（へいし）を、さ、る、と、て、十日官軍二百餘人日光より二里南今市（いまし）といふと、と、て、

押寄たるは日光奉行新庄右近將監出むのひて何等の義あり此處へ差向りきたるぞ此處ハ徳川家の木祖の廟所にてゆせと申けは元より東照宮へ用吏ありて差向たるありて朝敵板倉伊賀守ある者日光山ふかると居るより聞及ひつる間討奪むのひたるありと答る間去るは暫し御待被下べし某とくと穿鑿の上ありて御わし可申と官軍ふると日光山ふかるとる

十一日日光奉行某ハ伊賀守をひそめ高原越の閑道より會津へおゆるりて宗徒の家臣八人を以て

身代として官軍へ渡りたるを

○今日關宿の兵官軍の先鋒として關東勢と岩井といふ處あり戦ひたるは關宿の兵衰切たりは官軍利を失ひしとて

十二日近日江戸旗下の士脱走して何ちこちに屯集するものほる多し種々の隊名ありて二百人或ハ三百人より五六百人ありともありとの風聞あり

十三日官軍今市を引退き板倉がとるより八人の者を宇都宮へ送しゆき城主戸田某ありておれをれより軍使を以て喜連川・大田原・丹羽等へ申通たり

會津一攻入のへきの間速ふ人数をくり出さるべき也
 とつりなきはびいづきも兼諾の趣返答ふあふとのへきも
 會津の兵安久津川の邊に充滿したるのより一風
 聞らりしれはこれ兵卒を出すのたう

○今日栗橋のまき上り彰義隊の兵官軍の
 糧船二艘を足はかりて陸地より鉄砲うちけ忽ち二
 艘とも捕あさりしとぞ

十四日常州笠間の兵卒三百人余官軍の命を受
 野州宇都官の援兵とて操出し栗橋驛にて兵
 糧はひぬくるをいそぐ彰義隊の兵驛とてこの交

田の中小埋伏して待居たるに案の如く笠間の兵卒
 ころりくるをわれはねひすりて打出しる鉄砲に
 不意とてきて散らになりて敗北しけりけり手
 負死人をたうらぶおほしとぞ

○今日徳次良はても合戦ありしと風聞あり
 十五日江戸脱走の歩兵三百餘人東寧川を下り總導
 河岸より上陸して下妻陣屋の役人を説伏し大砲壹挺
 砲兵三十人金八百兩を借け夫より官軍の屯集したる
 關本とつ不處へ押寄日の八ツ時ころより合戦はしはる
 夕六ツ時過おそたうのひしが關東方勝利を官軍あり

笠間の兵多半討死したるよし

○此日小山とよだの間あても合戦ありそはとも官軍不利のよしめて江戸脱走の兵士二百八十五人分捕の武具或い首あつたがさへ大平山へのぼりて一宿したじとを○又下總の竹の原にとも官軍と會津勢とたういしと風説あり會津勢關宿とやれをうひしともいなり○又一季の關東勢絹川とわたりて久保田河岸より結城へ攻へしともいなり

右滑耀先生日記十六日より閏四月五日迄の處は茅四編小出スベし石橋小山合戦並宇都宮の戦争甚ど詳也

○

去ル十三日夕七ツ時頃相州箱根の下真鶴のともぬへ蒸氣船三艘着岸し木下保加賀守に届いた徳川家脱走三百人乗込休泊しつゝゆより相届たる故小申原より役人出張あり相改ゆるところ雜兵平士ともあてい凡三千人あつた有之趣翌十四日町觸出ゆ由

歎きい

なまじり脱のつらさといふ州のまよ

あつたつたをあらざらぬ

漢人ふか

○

こころよき事多し蜂の巣を祝ひ
 の道程や引起されまゝの垣
 存くありし白ひもふや梅の世
 ちるむと何とならぬち能
 松うもよけりさ進てぬる水氷
 精きいりけりいそ精のついで之
 ねよ来るむねきひとの悟さか

寛 裕
 波 岐
 陀 堤
 一 狂
 寄 舟
 親 洲
 鹿ノ子

白糸

白糸

手
紙
三

西垣文庫 特
文庫 10
7388
3